

コミュニケーション行動評価概念の日中比較：大学生に対する調査に基づいて

著者	西嶋 義憲, 陶 琳
著者別表示	Nishijima Yoshinori
雑誌名	語彙研究 = The Journal of The Study of Vocabulary
巻	7
ページ	66-78
発行年	2009-12-31
URL	http://hdl.handle.net/2297/20631



コミュニケーション行動評価概念の日中比較

—大学生に対する調査に基づいて—

西嶋 義憲・陶 琳

1. はじめに

グローバリゼーションの拡大にともない、文化的背景の異なる者どうしの出会いが日常的になってきた。異文化間のコミュニケーションでは誤解が頻繁に起こる。誤解は、対話相手の用いる言語の知識が互いに不足していること以外に、文化や社会によって異なる価値体系が原因となることもある。近年、社会行動の規範にかかわる語彙に着目した研究として、コミュニケーション行動評価概念の研究が行なわれるようになってきた。コミュニケーション行動評価概念とは、例えば「丁寧な」「礼儀正しい」「生意気な」といった、当該社会で通用している社会行動の規範を背景に対話相手ないし発話者自身の言語行動をメタコミュニケーション的に評価する概念のことである。中国人と日本人の接触が日常的になっている今日、お互いのコミュニケーション行動の背後にある行動規範や価値観の異同を知ることは不必要な誤解を予め避けるためにも重要である。そこで、本研究では、そのような日中間の異同を明らかにするために、日中で対応するコミュニケーション行動評価概念の調査をいくつかの観点から実施した。本稿では、調査結果の一部を報告する*。

1. 先行研究

1.1. コミュニケーション行動評価概念

どの言語にも社会的行動を肯定的に、また、否定的に評価するメタコミュニケーション的な表現がある。例えば、日本語には「丁寧な」「生意気な」「気さくな」、中国語には「有礼貌」「傲慢」「坦率」などの語彙がある。これらは社会的相互行為の背後にある行動規範や価値観を参照しながら評価する概念を表わす。また、行動規範にそった行動は、「当たり前」「自然」「普通」と評価され、コミュニケーションにおける「通常性」を構成する。そのような「通常性」から逸脱した行動が肯定的・否定的に評価されるのである。そこで、ある言語のコミュニケーション行動評価語彙を収集・分析することにより、それを使用する当該社会で通用している「通常性」を明らかにすることができることになる。

「通常性」は個別文化的である。コミュニケーションが「当たり前」に進行しているとき、われわれが何に注目して行動しているのかは自明過ぎてわかりにくい。ところが、個別文化ごとの「通常性」を比較することにより、それぞれの文化で何に注目しながら行動するのかがわかる。それによって、ポライトネス行動の背景にある協調行動の個別文化ごとの違いあるいは通常性の違いを明らかにすることができる。

1.2. コミュニケーション行動評価概念の先行研究

これまでになされてきたコミュニケーション行動評価概念についての理論的基盤研究はいく

つかある。Nishijima(1996)は、スカーラを用いた評価概念の記述研究のための枠組みを提示している。また、西嶋(2000)は、異なる2つの言語を比較するための対照社会言語学的な枠組みを提案している。さらに、丸井(2006)では、人間どうしの形式的協調を含めた、総合的な評価概念研究の方向付けとプログラムが議論されている。

コミュニケーション行動評価概念の個別言語研究はドイツ語と日本語についてなされている。まずドイツ語のコミュニケーション行動評価概念研究については、Hermanns (1993)が*freundlich*の歴史的意味変化を扱い、Hermanns (1995)は語彙とその3機能との関係を論じている。Reinelt (1995)は、*Höflichkeit*の語義の歴史的変遷を、Yamashita (2003)は現代ドイツの重要な概念(*freundlich, ehrlich*)を分析している。また、Kuhlmann (2005)は西嶋(2000)の枠組みに依拠し、実用辞書の語義記述を利用したドイツ語語彙の分析を行なっている。

日本語に関するコミュニケーション行動評価概念の研究として、たとえば、Nishijima (1995)は「丁寧な」の語義の歴史的変遷とその同義表現「礼儀正しい」との関連を分析し、Nishijima (1996)では評価概念と同等の機能を有する文法的項目を論じている。Yamashita (1996)は、「丁寧な」「傷つけない」など8つの評価概念についてアンケート調査を実施している。

コミュニケーション行動評価概念の対照は、これまで、日米・日独・日韓・日中について研究がなされている。日米のコミュニケーション行動評価概念についての対照研究としては Ide *et al.* (1992)をあげることができる。これは、英語の *polite* と日本語の「丁寧な」に関わる9つの対応概念の対照である。日独のコミュニケーション行動評価概念についての対照研究には Marui *et al.* (1996)があるが、そこではコミュニケーション行動評価概念を対照的に研究するための枠組みが提出されている。そのほか、Nishijima (2000)はアンケート調査および語彙意味論にもとづく評価概念の日独対照研究であり、Nishijima (2007)はコミュニケーション行動をコントロールするための慣用表現の日独比較を試みている。また西嶋(2003)は、コミュニケーション行動をコントロールする表現と視点との関わりを分析している。つぎに、日韓のコミュニケーション行動評価概念についての対照研究は南ほか(2006)があるが、そこではポライトネス・グラマーを用いた日韓評価概念の記述の試みがなされている。最後に、日中のコミュニケーション行動評価概念についての対照研究としては、陶(2008)がある。そこではポライトネス・グラマーを用いた日中評価概念「親切」と「謙虚」の記述の試みがなされている。

1.3. 中国語のポライトネス研究

中国語に関する従来のポライトネス研究は、日本語学習という枠組みの中で日本語と構造的に対比する形式でなされてきたものが多い。そのうちのいくつかを挙げてみよう。吉見ほか(1992)によれば、呼称については、日本語は年齢差を、中国語は世代差を重視すると主張している(cf. ト, 2004)。他方、依頼については、橋元ほか(1992)によれば、日本語は「上下関係」を、中国語は「親疎関係」を重視する傾向があると分析している。また、馬場&慮(1992)によれば、日本語は年齢より「上役、下役」といった社会的地位を、中国語は地位より年齢差を優先することである。母(2002)の研究では中国語がポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの言語に分類されている。他方、笹川(1999)の研究では、日本語は消極的ポライトネスの言語、中国語は「親しさ」中心の言語であると論じている(cf. 平, 2006; 2008)。李(2008)によれば、中国語では年齢の「上下」の差よりも「親疎」が重要とされ、上下を意識しやすい日本語使用の際、干渉するという。相原(2008)によれば、中国人の行動分析によって、親しい相手に自分の領域をおかされても抵抗なしという傾向があることが明らかにされている。これらの研究の成果は互いに矛

盾するものもある。一覧表にしてみよう。

表1 先行研究の日中比較結果

	日本語	中国語
吉見ほか(1992)	年齢	世代
橋元ほか(1992)	上下関係	親疎関係
馬場ほか(1992)	社会的地位	年齢差
母(2002)	ネガティブ・ポライトネス社会	ポジティブ・ポライトネスの言語
笹川(1999)	ネガティブ・ポライトネスの言語	「親しさ」を中心とした言語
李(2008)	上下	親疎
相原(2008)		親しい関係では距離感が乏しい

この表を見る限り、基本的に、日本語は年齢や社会的地位を優先し、中国語は親疎を重視する傾向があることがわかる。ところが、その傾向に反して中国語では年齢や世代差を優先すると主張する研究もある。これらの一般的傾向について、コミュニケーション行動一般にかかわる相互行為の評価概念の分析結果と比較することによって検証する。

2. 相互行為基盤の日中比較のための調査

2.1. 調査方法

本研究の調査は、記入式アンケート調査法による。短期間で比較的多量のデータを収集できるからである。本研究では、親しさと社会的な地位の差に基づいて、3タイプの対話相手を設定した。具体的には、1) 親しい同年齢の友人 (=親友)、2) それほど親しくない同年齢の友人、3) かなり年輩でそれほど親しくない教師である。日本人と中国人の大学生を被験者として、これらの人物を想定してもらい、その人物と話すときにとくに考慮する概念はどれかを調査した (cf. Marui *et al.*, 1996)。

調査した概念はつぎの8つである：①「ざっくばらんに話す」、②「丁寧に」、③「親しみを込めて」、④「礼儀正しく」、⑤「気楽に」、⑥「立場をわきまえながら」、⑦「相手を傷つけないように」、⑧「距離をおかずに」。

このような概念の調査を利用して、現在日本人大学生、中国人大学生はポライトネスに関するコミュニケーション行動評価概念についてどのような意識を持っているのか、現代社会の人間関係の中でどのような価値を置くか、また現代日本人大学生、中国人大学生、ポライトネスに関するコミュニケーション行動評価概念の意識は一致しているか、それとも大きな差異があるか。本研究はこれらについて日本人大学生、中国人大学生に対して実施したアンケート調査の結果を検討していく。

2.2. 実施時期と場所

2008年11月および2009年3月から6月まで、アンケート調査を行った。調査実施場所は日本国内では神奈川大学・金沢大学・富山大学、中国国内では北京第二外国語大学・北京工業大学である。

2.3. 調査対象

回収できた回答数は、日本人側では212名(男88、女124)、中国人側160名(男58、女102)であった。男女の母数に差があるので、その中から男女各50名ずつ合計100名のサンプル抽出

を実施した。

3. 結果

3.1. 評価概念の3場面との相関（日本人大学生）

3.1.1. 本調査結果

まず、日本人大学生に対して3つ場面1) 親しい同年齢の友人、2) それほど親しくない同年齢の友人、3) かなり年輩でそれほど親しくない教師という3タイプの対話相手について質問した結果は表1にまとめる。

表2 3場面の日本人大学生の意識結果

項目	場面1(親友)	場面2(親しくない同級生)	場面3(親しくない教師)
ざっくばらんに	61.0%	24.0%	3.0%
丁寧に	28.0%	71.0%	96.0%
親しみを込めて	82.0%	48.0%	34.0%
礼儀正しく	17.0%	63.0%	97.0%
気楽に	99.0%	43.0%	8.0%
立場をわきまえながら	35.0%	72.0%	98.0%
相手を傷つけないように	80.0%	93.0%	81.0%
距離をおかずに	81.0%	28.0%	10.0%

表2を見ると、「ざっくばらんに」「親しみを込めて」「気楽に」「距離をおかずに」については、場面2や場面3より場面1に対して強く意識している日本人大学生が多い。また場面1と場面2より場面3の方が「丁寧に」「礼儀正しく」「立場をわきまえながら」を考慮するのが良いと考える日本人大学生が多い。そして、「相手を傷つけないように」については場面1と場面3より場面2に対して、強く意識する日本人大学生が多いと言える。

3.1.2. 日本人大学生の傾向的特徴

日本人大学生の傾向的特徴は、8つの概念を3つに分類することが可能である。

(1) 場面1でとくに考慮され、場面3であまり考慮されない概念：

「ざっくばらん」「親しみをこめて」「気楽に」「距離をおかずに」

(2) 場面3でとくに考慮され、場面1でそれほど考慮されない概念：

「丁寧に」「礼儀正しく」「わきまえ」

(3) 全体的に配慮されるが、場面2でとりわけ考慮される概念：

「傷つけない」

表2からわかるように、場面1と場面3がシンメトリカルな関係にあるといえる。

3.1.3. 先行研究 Marui *et al.* (1996) との比較

本研究のアンケート調査の背景にあるMarui *et al.* (1996) の研究結果との比較は次のページの表3に示す。

本調査は、Marui *et al.* (1996) の調査時期から13年経過しているが、構造的には基本的な変化は認められない。Marui *et al.* (1996) の調査結果は本稿の調査結果と比べると、場面1と場面3がシンメトリカルな関係にあるという傾向に変化はない。ただ数値に多少の増減変化が認められる。例えば、それほど親しくない同級生に対する「丁寧に」や「礼儀正しく」の配慮割合が増加した。親しい友人に対する「丁寧さ」「相手を傷つけない」といった配慮も増加した。一方、

それほど親しくない同輩に対しては「ざっくばらんに」が減った。また教師に対する「親しみを込めて」も約12ポイント増加した。ただし、このような違いは、経年による若者の意識の変化によるものかどうかは不明である。今後のより詳細な調査が望まれる。

表3 本調査結果とMarui *et al.* (1996) の研究結果との比較

項目		場面1	場面2	場面3
ざっくばらんに	(1996)	88.4%	45.1%	3.9%
	(2009)	61.0%	24.0%	3.0%
丁寧に	(1996)	8.4%	55.2%	97.4%
	(2009)	28.0%	71.0%	96.0%
親しみを込めて	(1996)	75.0%	50.3%	22.5%
	(2009)	82.0%	48.0%	34.0%
礼儀正しく	(1996)	8.4%	50.3%	99.4%
	(2009)	17.0%	63.0%	97.0%
気楽に	(1996)	96.1%	52.9%	13.8%
	(2009)	99.0%	43.0%	8.0%
立場をわきまえながら	(1996)	29.2%	68.0%	96.8%
	(2009)	35.0%	72.0%	98.0%
相手を傷つけないように	(1996)	68.4%	92.2%	80.1%
	(2009)	80.0%	93.0%	81.0%
距離をおかずに	(1996)	80.6%	24.2%	5.2%
	(2009)	81.0%	28.0%	10.0%

3.2. 評価概念の3場面との相関（中国人大学生）

3.2.1. 調査結果

中国人大学生に対して3つ場面、1) 親しい同年齢の友人（＝親友）、2) それほど親しくない同年齢の友人、3) かなり年輩でそれほど親しくない教師という3タイプの対話相手について質問した結果は表4にまとめた。

表4 中国人大学生に対する3場面の調査結果

項目	場面1	場面2	場面3
直言不讳（ざっくばらんに）	67.0%	10.0%	18.0%
很有礼貌（丁寧に）	44.0%	90.0%	98.0%
平易近人（親しみを込めて）	70.0%	77.0%	63.0%
遵循礼仪（礼儀正しく）	38.0%	82.0%	96.0%
轻松（気楽に）	87.0%	25.0%	12.0%
知道自己身份（わきまえ）	56.0%	86.0%	90.0%
不伤害对方（傷つけない）	76.0%	93.0%	86.0%
不保持距离（距離なく）	55.0%	14.0%	11.0%

表4を見ると、「直言不讳（ざっくばらんに）」について、場面2（親しくない同級生）と場面3（年齢差のある親しくない教師）より場面1（親友）が認識されている中国人大学生が50ポイント多い。「不保持距離（距離なく）」については場面2と場面3より場面1に対する方が認識されている中国人大学生が40ポイント多い。特に「轻松（気楽に）」について、場面2と場面3より場面1の方が認める中国人大学生が60ポイント多い。「很有礼貌（丁寧に）」「遵循礼仪（礼儀正しく）」「知道自己身份（わきまえ）」を話すのが良いと考える中国人大学生が場面1より場面2と場面3が多い。一方「平易近人（親しみを込めて）」「不伤害对方（傷つけない）」については場面1と場面3より場面2に対して、認識されている中国人大学生が多いと言える。

3.2.2. 中国人大学生の傾向的特徴

表4を見ると、中国人大学生の傾向的特徴について、8つの概念を3つに分類することができる。

(1) 場面1でとくに考慮されるが、場面2と場面3であまり考慮されない概念：

「直言不讳(ざっくばらん)」「轻松(気楽に)」「不保持距离(距離をおかずに)」

(2) 場面2と場面3でとくに考慮され、場面1でそれほど考慮されない概念：

「很有礼貌(丁寧に)」「遵循礼仪(礼儀正しく)」「知道自己身份(わかまえ)」

(3) 全体的に配慮されるが、場面2でとりわけ考慮される概念：

「平易近人(親しみをこめて)」「不伤害对方(傷つけない)」

つまり、場面1と、場面2および場面3がシンメトリカルな関係にあるといえる。

3.3. 評価概念分布の日中比較

日本人大学生と中国人大学生の調査結果の比較は表5にまとめてある。なお、顕著な差を示すものには下線を施してある(以下、同様)。

「相手を傷つけない(不伤害对方)」「ざっくばらんに話す」については三つの場面ともに日中の大学生の考慮する割合がほぼ同じである。場面1については、日本人大学生99.0%と中国人大学生87.0%が「気楽に」をとくに考慮するが、日本の大学生は中国の大学生より同意率が10ポイント高い。特に、「気楽に話す」という概念が強く意識されていることが明らかになった。「距離をおかずに話す」について、日本人大学生(81.0%)は中国人大学生(55.0%)より同意率が26ポイント高い。さらに、「丁寧に」「礼儀正しく」「立場をわかまえながら」については日中の大学生ともに考慮する割合が低い。しかし、全体的には中国の大学生は日本の大学生より意識する割合が高いという点に日中の大学生の差が見られる。場面2に関して「丁寧に」「親しみを込めて」「礼儀正しく」「立場をわかまえながら」を意識するのは、中国人大学生は日本人大学生より10ポイント以上高いが、「気楽に」「距離をおかずに話す」については、日本人大学生は中国人大学生より意識率が10ポイント高い。つまり、中国人大学生は親しくない同輩(「疎」の人物)については、打ち解けた態度をとらず、距離をおく傾向にあるようだ。場面3の「親しみを込めて」について、中国人大学生は日本人大学生より20ポイント以上多く配慮するが、それ以外については日中大学生の結果はほぼ同じである。

表5 日中大学生の傾向比較

項目	場面1	場面2	場面3
ざっくばらんに	61.0%	24.0%	3.0%
直言不讳	67.0%	10.0%	18.0%
丁寧に	28.0%	71.0%	96.0%
很有礼貌	44.0%	90.0%	98.0%
親しみを込めて	82.0%	48.0%	34.0%
平易近人	70.0%	77.0%	63.0%
礼儀正しく	17.0%	63.0%	97.0%
遵循礼仪	38.0%	82.0%	96.0%
気楽に	99.0%	43.0%	8.0%
轻松	87.0%	25.0%	12.0%
わかまえ	35.0%	72.0%	98.0%
知道自己身份	56.0%	86.0%	90.0%
傷つけない	80.0%	93.0%	81.0%
不伤害对方	76.0%	93.0%	86.0%
距離なく	81.0%	28.0%	10.0%
不保持距离	55.0%	14.0%	11.0%

表5から読み取れる点をまとめるとつぎのようになる：

- 日本人学生：場面1と場面3がシンメトリカルな傾向
(ただし、「傷つけない」をのぞいて)
- 中国人学生：場面1と、場面2および場面3がシンメトリカル
(ただし、「平易近人」と「不伤害对方」をのぞいて)

場面2における日中の大学生の相違から、中国人学生は、年齢差よりも親疎関係を重視するという傾向があると理解できる¹⁾。さらに、場面1における行動については、日本人と中国人は異なる分布をしている。すなわち、中国人は、親しい友人に対しても距離をおく「丁寧」「礼儀」「わかまえ」という概念を意識する割合が高い。この点は、親しい関係では距離をおく配慮行動は少ないという指摘(相原, 2008)と明らかに異なる。これをどのように説明することができるのかについては現時点では不明である。さらに異なる観点からの分析が必要とされる。

3.4. 評価概念の男女差

場面ごとの日中大学生の意識における男女差はどうであろうか。日本人と中国人の男女別の数値を付記した表6と表7を掲げる。表の(A / B)内のAとBはそれぞれ男女の数値を表わす。

3.4.1. 日本人大学生の男女差

日本人大学生の男女差を付記した表6である。

表6 日本人大学生の男女差の結果

項目	場面1	場面2	場面3
ざっくばらんに	61.0% (72.0 / 50.0)	24.0% (22.0 / 26.0)	3.0% (4.0 / 2.0)
丁寧に	28.0% (24.0 / 32.0)	71.0% (62.0 / 80.0)	96.0% (98.0 / 94.0)
親しみを込めて	82.0% (74.0 / 90.0)	48.0% (46.0 / 50.0)	34.0% (28.0 / 40.0)
礼儀正しく	17.0% (16.0 / 18.0)	63.0% (60.0 / 66.0)	97.0% (100.0 / 94.0)
気楽に	99.0% (98.0 / 100.0)	43.0% (42.0 / 44.0)	8.0% (12.0 / 4.0)
立場をわかまえながら	35.0% (40.0 / 30.0)	72.0% (72.0 / 72.0)	98.0% (98.0 / 98.0)
相手を傷つけない	80.0% (72.0 / 88.0)	93.0% (90.0 / 96.0)	81.0% (78.0 / 84.0)
距離をおかずに	81.0% (86.0 / 76.0)	28.0% (28.0 / 28.0)	10.0% (6.0 / 14.0)

表6を見ると、質問「かなり年輩でそれほど親しくない大学教員と話しをするとき、どんなことに注意しますか」については日本大学生の98%以上の男性と94%以上の女性が「丁寧に」「礼儀正しく」「立場をわかまえながら」を意識している。特に、上下関係の価値観が強く認識されていると言える。また「相手を傷つけないように」を考慮する割合も7割以上である。全体的に高い傾向があるが、そこに男女の差は認められない。なお「ざっくばらんに話す」「気楽に話す」「親しみを込めて話す」「距離をおかずに話す」については日本人大学生の男女ともに意識率が低い。教師のように親しくなく年上の人物に対しては、かなり距離を配慮した行動が見られる。

日本人大学生の男女差に関する調査で10ポイント以上の差が認められた概念を場面ごとに分

けて記してみるとつぎのようになる。

場面1 (親友) :

「ざっくばらん」「親しみを込めて」「わきまえ」「傷つけない」「距離なく」

場面2 (それほど親しくない同輩) : 「丁寧」

場面3 (それほど親しくない年上の教員) : 「親しみをこめて」

「ざっくばらん」「わきまえ」「距離なく」をのぞいて、女性のほうが数値が高い傾向がある。親しい相手に対して、女性はより「親しみを込めて」、より「傷つけない」よう意識する。他方、男性はより「距離を置かない」よう意識する。それほど親しくない同輩に対して、女性はより「丁寧に」を配慮する傾向があるが、それ以外については男女間に顕著な差が見られない。

3.4.2. 中国人大学生の男女差

表7には、中国人学生について男女差を付記してある。この表を見ると、中国人大学生については、日本人大学生と異なり、3場面のほぼすべてにおいて男女差が認められる。全体的に場面1より場面2と場面3の「直言不讳(ざっくばらんに)」「轻松(気楽に)」「不保持距离(距離をおかずに)」については中国大学生の男女ともに同意率が極めて低い。しかし、場面2と場面3の「很有礼貌(丁寧に話す)」、場面2の「不伤害对方(相手を傷つけないように)」、場面3の「かなり年輩でそれほど親しくない教師と話をするとき」の「遵循礼仪(礼儀正しく話す)」については男女ともに意識が極めて高い。他の特徴として、3場面に共通して男女の意識がほぼ同じであるのが「不保持距离(距離をおかずに)」「轻松(気楽に)」である。

表7 中国人大学生の男女差の結果

項目	場面1	場面2	場面3
直言不讳(ざっくばらんに)	67.0% (80.0 / 54.0)	10.0% (16.0 / 4.0)	18.0% (22.0 / 14.0)
很有礼貌(丁寧に)	44.0% (38.0 / 50.0)	90.0% (88.0 / 92.0)	98.0% (96.0 / 100.0)
平易近人(親しみを込めて)	70.0% (64.0 / 76.0)	77.0% (70.0 / 84.0)	63.0% (68.0 / 58.0)
遵循礼仪(礼儀正しく)	38.0% (42.0 / 34.0)	82.0% (76.0 / 88.0)	96.0% (92.0 / 100.0)
轻松(気楽に)	87.0% (88.0 / 86.0)	25.0% (28.0 / 22.0)	12.0% (14.0 / 10.0)
知道自己身份(立場をわきまえながら)	56.0% (48.0 / 64.0)	86.0% (80.0 / 92.0)	90.0% (82.0 / 98.0)
不伤害对方(相手を傷つけないように)	76.0% (64.0 / 88.0)	93.0% (90.0 / 96.0)	86.0% (80.0 / 92.0)
不保持距离(距離をおかずに)	55.0% (60.0 / 57.8)	14.0% (16.0 / 12.0)	11.0% (14.0 / 8.0)

3 場面に共通して女性の意識が高いのは「知道自己身份(立場をわきまえながら)」である。更に女性は、すべての場面で「不伤害对方(相手を傷つけない)」に高い意識(88%以上)がある。場面1と場面2については男性がより「直言不讳(ざっくばらんに)」の意識が高い。女性はより「平易近人(親しみを込めて)」を意識する。それほど親しくない同輩について、女性はより「礼儀正しく」を意識する。つまり、女性は男性より「親しみを込めて」「礼儀正しく」「立場をわきまえながら」という概念への意識する割合が高い。とりわけ上下関係の差がある場合に、顕著な男女の差が見られる。

3.4.3. 男女差の日中比較

日本人と中国人大学生の男女差については表8にまとめた。

表8 日中両国大学生の男女差の結果

項目	場面1	場面2	場面3
ざっくばらんに	(72.0 / 50.0)	(22.0 / 26.0)	(4.0 / 2.0)
直言不讳	(80.0 / 54.0)	(16.0 / 4.0)	(22.0 / 14.0)
丁寧に	(24.0 / 32.0)	(62.0 / 80.0)	(98.0 / 94.0)
很有礼貌	(38.0 / 50.0)	(88.0 / 92.0)	(96.0 / 100.0)
親しみを込めて	(74.0 / 90.0)	(46.0 / 50.0)	(28.0 / 40.0)
平易近人	(64.0 / 76.0)	(70.0 / 84.0)	(68.0 / 58.0)
礼儀正しく	(16.0 / 18.0)	(60.0 / 66.0)	(100.0 / 94.0)
遵循礼仪	(42.0 / 34.0)	(76.0 / 88.0)	(92.0 / 100.0)
気楽に	(98.0 / 100.0)	(42.0 / 44.0)	(12.0 / 4.0)
轻松	(88.0 / 86.0)	(28.0 / 22.0)	(14.0 / 10.0)
立場をわきまえながら	(40.0 / 30.0)	(72.0 / 72.0)	(98.0 / 98.0)
知道自己身份	(48.0 / 64.0)	(80.0 / 92.0)	(82.0 / 98.0)
相手を傷つけない	(72.0 / 88.0)	(90.0 / 96.0)	(78.0 / 84.0)
不伤害对方	(64.0 / 88.0)	(90.0 / 96.0)	(80.0 / 92.0)
距離をおかずに	(86.0 / 76.0)	(28.0 / 28.0)	(6.0 / 14.0)
不保持距离	(60.0 / 57.8)	(16.0 / 12.0)	(14.0 / 8.0)

この表からわかるように、日中両国の大学生について3つの場面に共通して男女の意識に顕著な差がほとんど見られないのは「気楽に／轻松」である。これ以外の概念については、3場面のほぼすべてにおいて日中で男女差が認められる。男女の意識の差に関して、日中で類似の分布をするもの、日中で異なる分布をするもの、そして、日本人か中国人のどちらか一方に男女差が認められるもの、この3つに分けることができる。

(1) 男女差の分布が日中で類似の傾向を示す概念：

場面1 (親友)

「ざっくばらん／直言不讳」 → 男性2割高い傾向

「親しみを込めて／平易近人」「傷つけない(不伤害对方)」 → 女性高い傾向

(2) 男女差の分布が日中で異なる傾向を示す概念：

場面1 (親友)

「立場をわきまえながら／知道自己身份」 → 日本：男性高い傾向

中国：女性高い傾向

場面3 (それほど親しくない年上の教師)

「親しみを込めて／平易近人」 → 日本：女性高い傾向

→ 中国：男性高い傾向

(3) 男女差が日中のどちらか一方で認められる概念 (他方は男女分布はほぼ同じ)：

場面1 (親友)

「距離をおかずに／不保持距离」 → 日本：男性高い傾向

「丁寧に／很有礼貌」 → 中国：女性高い傾向

場面2 (それほど親しくない人)

「ざっくばらん／直言不讳」 → 中国：男性高い傾向

「親しみを込めて／平易近人」「礼儀正しく／遵循礼仪」

「立場をわきまえながら／知道自己身份」 → 中国：女性高い傾向

「丁寧に／很有礼貌」 → 日本：女性高い傾向
場面3（それほど親しくない年上の教師）
「立場をわきまえながら／知道自己身份」「傷つけない／不伤害对方」
→ 中国：女性高い傾向

4. まとめと考察

4.1. 全体的傾向

コミュニケーション行動評価概念の日中間の異同を簡単にまとめ、それぞれについて考察する。

表5からわかるように、日本語と中国語のコミュニケーション行動評価概念の共通点は、想定される3タイプの相手ごとに、話者が気にかける評価概念が傾向としてほぼ同様の分布をしているという点である。たとえば、「丁寧に」は、場面1・場面2・場面3という順で、気にかける度合いが増している。逆に、「距離をおかずに」は、場面1・場面2・場面3の順で考慮する割合が減少している。また、「傷つけない」は、3場面すべてにおいて、高い割合で注意が向けられている。

4.2. シンメトリカルな関係の違い

上記のように、場面ごとに気にかける概念の傾向はほぼ類似の傾向を示し、シンメトリカルな関係を想定できるが、その関係につきのような違いがある：

- 日本人学生：場面2をはさんで場面1と場面3がシンメトリカル
- 中国人学生：場面1と、場面2および場面3がシンメトリカル

すなわち、日本人学生の評価概念の使用においては、場面2を中間に場面1と場面3が対立しているが、中国人の場合は、場面1と、場面2および場面3が対立関係にある。これは、日本社会では、「親しさ」という心理的距離と「目上・目下」という社会的距離の二つの条件が強く関与しているが、中国社会では、「親しさ」という心理的距離をより強く気にかけるという傾向を示している。中国語が対人関係に関して「親しさ」を重視しているという先行研究の指摘をここで確認することができる。

4.3. 場面ごとの違い

場面1（親しい友人との会話）に対する行動については、日本人と中国人は異なる分布傾向を示している。場面1において、中国人大学生は「丁寧に」「礼儀正しく」「立場をわきまえながら」を意識する割合が日本人大学生より高いが、「親しみを込めて」「気楽に」については、中国人大学生の意識率のほうが中国人大学生より高い。すなわち、中国人は親しい友人に対しても「丁寧」「礼儀」「わきまえ」を配慮する度合いが高い。この点について相原(2008)と異なる結果となった。その理由について、今回の調査だけでは判断できない。

場面2においても、中国人大学生の「丁寧に」「親しみを込めて」「礼儀正しく」「立場をわきまえながら」を気にする割合は日本人大学生より高い。その原因としては中国社会では、それほど親しくない同級生に対して、「外の人間」と認識し、そのような「疎」の人物に対しては礼儀正しく行動すべきであるという意識が背景にあると思われる。

「ざっくばらんに」という概念については、場面1（親友との会話）の場合、両国の大学生の意識する割合がほぼ同じで6割である。場面2（それほど親しくない同級生との会話）では、

日本人大学生の気にかかる割合は中国人大学生より高いが、場面3（親しくなく年齢の離れた大学教員との会話）の場合、中国人大学生の意識する割合が日本人大学生よりかなり高い。その原因は中国社会では「尊師愛生」「尊老」という価値観のもと、中国人大学生は大学教員を尊敬すべき存在として思い、親しくなくとも信頼しているので、このような結果が得られたと推論する。なお、この結果は盧(2001)の研究結果と一致している。

「距離をおかずに」については、場面1と場面2ともに、日本人大学生がこの概念を意識する割合は中国人大学生より高い。日本人は同年齢ならば、たとえ親しくなくとも距離をおかないで接しようとする傾向があるが、中国の大学生は親しくない場合は「距離をおかずに」を意識することが極めて薄いと言える。

4.4. 男女差

今回の調査では、日中両言語でのコミュニケーション行動評価概念の男女に関する異同も見られた。類似点と相違点の順にまとめてみよう。

まず、評価概念の使用傾向において男女差が日中で類似している場合である：

場面1（親友）

「ざっくばらん」 → 男性が高い傾向

「親しみを込めて」「傷つけない」 → 女性が高い傾向

「ざっくばらんに」に対して、場面1の場合、中国と日本の男子大学生は中国と日本の女子大学生より同意率が高い。男子大学生は女子大学生より親しい人に対して率直に接しようとする意識が強いと思われる。このように、親しい友人に対して、男性はよりフランクな態度をとるが、女性は親しみを強調する傾向にある。女性は同時に、親しくても一定の配慮をしていることがわかる。そして、その傾向は日中で共通している。女性は、関係を重視するという一般的な傾向がここにおいても認められる。

つぎは、評価概念の男女の使用傾向が日中で異なる場合である：

場面3（それほど親しくない年齢差のある大学教師）

「親しみを込めて」 → 日本：女性が高い傾向

→ 中国：男性が高い傾向

この結果はどのように理解したらいいのだろうか。一般に女性は関係を、男性は社会的地位を重視する傾向にあるとされるが、その傾向とは部分的にしか一致していない。本調査からだけでは、解釈することはできない。

5. おわりに

本稿でも示されたように、中国人の会話では「親しみ」に関わるコミュニケーション行動評価概念が比較的大きな地位を占めていることが確認された。もしこれが正しいとするなら、場面3を心理的距離に関して変更した場面4（かなり年上だが、親しい大学教員）を設定して再調査を行なうと興味深い結果がでるかもしれない。すなわち、本研究では、心理的距離と社会的距離の2つの観点から、同輩で親しい相手と同輩で親しくない相手、年齢差があつて親しくない相手の3とおりの対話相手を設定したが、もう一つ、年齢差があるが、親しい対話相手という場面もありうる。たとえば、少人数のゼミにおいて論文指導を受けている学生と大学教員との関係には、それに対応する関係が想定可能である。この場面では、日本と中国の振る舞いが異なる可能性がありうる。

今後は、本稿の調査結果を踏まえて、問題点をより幅広い観点から検討し、今回対象とならなかった、年齢差のある親しい教員を相手とする場面を含めた調査や語場を利用した語彙意味論的調査、さらに語彙化されていない慣用的表現との相互関連および談話場面での評価概念の使用といった総合的な観点からの検証が必要である。

注

* 本稿は、2008年度「公益信託田島統堂語彙研究基金」による研究成果の一部として2009年9月5日(土)に学習院大学で開催された2009年度語彙研究会大会において口頭発表した原稿に加筆したものである。なお、発表後、数多くの貴重なご意見をいただいた。記して感謝する。

1) ドイツ人と同様の分布をする。ドイツ語では、二人称代名詞が二種類ある。それは、親しさという基準で使い分けられるので、それが反映していると考えられる (cf. Nishijima, 2000)。中国語にもドイツ語と同様に「親疎」で使い分ける二人称代名詞があるが、それとの関連が予想できる。

参考文献

- 相原まり子(2008). 依頼表現の日中対照研究 一相手に応じた表現選択一. 『言語情報科学』, 6, 1-18.
- 馬場俊臣・慮春蓮(1992). 日中依頼表現の比較対照. 『北海道教育大学紀要』(第1部A), 43(1), 57-66.
- 母育新(2001). 待遇行動における日本人と中国人の比較 一ポライトネスの視点からの考察一. 『麗澤大学紀要』, 73, 209-225.
- 母育新(2002). ポジティブ・ポライトネスから見た日中の比較 一日本語教育の視点からの考察一. 『麗澤学際ジャーナル』, 1(1), 75-85.
- 橋元良明・笹川洋子・見城武秀・杉田優子(1992). 婉曲的コミュニケーション方略の異文化間比較 一9言語比較調査一. 『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』, 1, 107-159.
- 平静(2006). 日中のポジティブ・ポライトネスの対照研究 一日本語と中国語の談話分析を通して一. 『比較社会文化研究』, 20, 1-19.
- 平静(2008). 「是是非非」構文からみる中国語のポライトネス表現. 『比較社会文化研究』, 24, 75-80.
- Hermanns, F. (1993). Mit freundlichen Grüßen. Bemerkungen zum Geltungswandel einer kommunikativen Tugend. In W. P. Klein & I. Paul (Hgg.), *Sprachliche Aufmerksamkeit. Glossen und Marginalien zur Sprache der Gegenwart* (pp. 81-85). Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter.
- Hermanns, F. (1995). Kognition, Emotion, Intention. Dimensionen lexikalischen Semantik. In G. Harras (Hg.), *Die Ordnung der Wörter. Kognitive und lexikalische Strukturen* (pp. 138-178). Berlin & New York: Walter de Gruyter.
- ト雁(2004). 呼称におけるポライトネス心理考察 一親族呼称の虚構的用法に関する日・中・英語比較一. 『淑徳大学社会学部紀要』, 38, 313-328.
- Ide, S., Hill, B., Carnes, Y. M., Ogino, T., & Kawasaki, A. (1992). The concepts of politeness: An empirical study of American English and Japanese. In R. J. Watts, S. Ide, & K. Ehlich (eds.), *Politeness in Language: Studies in its history, theory, and practice* (pp. 281-297). Berlin etc.: Mouton de Gruyter.
- Kuhlmann, J. (2005). Sind Deutsche weniger kooperativ als Japaner? Eine semantische

Untersuchung. *Lebende Sprachen*, 2, 68-76.

- 李宜真(2008). 依頼の言語行動に関する日中語対照研究 —ポライトネスの観点から—. 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』, 3, 117-129.
- 盧万才(2001). 中国語と日本語の挨拶言葉の対照. 『麗澤大学紀要』, 73, 226-245.
- 丸井一郎(2006). 『言語相互行為の理論のために「当たり前」の分析』. 東京: 三元社.
- Marui, I., Nishijima, Y., Noro, K., Reinelt, R., & Yamashita, H. (1996). Concepts of Communicative Virtues (CCV) in Japanese and German. In M. Hellinger & U. Ammon (eds.), *Contrastive Sociolinguistics* (p. 385-409). Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- 南相璣, 西嶋義憲, & 斉木麻利子(2006). ポライトネス・グラマー —コミュニケーション行動評価概念の日韓比較—. 『金沢大学留学生センター紀要』, 9, 1-19.
- 西嶋義憲(2000). コミュニケーション行動評価概念研究のための予備的考察 —対照社会言語学の視点から—. 『金沢大学経済学部紀要』, 20(1), 107-132.
- 西嶋義憲(2003). “Was kann ich für Sie tun?” は「偉そう」か? —常用句を利用したコミュニケーション行動の日独比較—. 『かいろす』, 41, 19-36.
- Nishijima, Y. (1995). Über den Bedeutungswandel von “teinei”. —Zum internationalen Vergleich der Konzepte von kommunikativen Tugenden—. 『好村富士彦教授退官記念論文集』. 松山: 論文集刊行委員会, 207-220.
- Nishijima, Y. (1996). Bewertende Konzepte kommunikativen Verhaltens (BKKV) und soziale und kulturelle Verhältnisse. —Ein lexikalischer Ansatz anhand der Beschreibung in Wörterbüchern—. 『金沢大学教養部紀要』, 33(2), 63-78.
- Nishijima, Y. (2000). Freundlich und höflich: Interkulturelle Aspekte des kommunikativen Verhaltens. 金沢大学外国語教育研究センター 『言語文化論叢』, 4, 185-207.
- Nishijima, Y. (2007). For a Contrastive Study of Routine Formulas for Controlling Communicative Behaviors in German and Japanese: A Pilot Investigation. In S. Kusune, Y. Nishijima, & H. Adachi (eds.), *Socio-Cultural Transformation in the 21th Century? Risks and Challenges of Social Changes* (pp. 347-357). 金沢: 金沢電子出版.
- Reinelt, R. (1995). Wie die Höflichkeit ihr Gesicht verlor. 『愛媛大学教養部紀要』, 28, 131-160.
- 笹川洋子(1999). アジア社会における依頼のポライトネス (for you or for me) について —日本語・韓国語・中国語・タイ語・インドネシア語の比較. 『親和國文』, 34, 154-181.
- 施暉(2005). 「あいさつ」言語行動に関する日中比較研究 —日本語のあいさつに対する中国人留学生の違和感について—. 『広島国際研究』, 11, 245-263.
- 陶琳(2008). コミュニケーション行動評価概念の日中研究 —ポライトネス・グラマーを利用して—. 日本言語学会第10回年次国際大会 (JSLS2008) 予稿集, 85-88.
- Yamashita, H. (1996). Zu bewertenden Konzepten kommunikativen Verhaltens. —Am Beispiel des japanischen Anredeverhaltens—. 大阪大学言語文化部 『言語文化研究』, 22, 273-294.
- 吉見孝夫, 馬場俊臣, & 周蕊(1992). 中日両国語の呼称の比較. 『北海道教育大学紀要』(第1部A), 43(1), 33-42.

(金沢大学)